

第3回災害感染症セミナーin Shizuoka で講演しました（2015/7/4）

テーマ：第3回国連防災世界会議の報告

会場：城東保健福祉エリア保健福祉複合棟 3 階研修室（静岡市）

2015 年7月4日(土)に「第3回災害感染症セミナーin Shizuoka」が静岡県立総合病院・静岡市の主催、災害科学国際研究所などの後援で開催され、江川新一教授が発表しました。東日本大震災の教訓を共有し、東南海トラフ地震に備えて感染症をはじめとする災害時の健康被害にどう備えるかをテーマとして、静岡市と仙台市で交互に開催されているものです。

災害時に発生する感染症は、災害によって本来ない場所に病原体が出現する場合と、災害により整備されていた公衆衛生の崩壊による環境の悪化に起因する場合とがあります。病原性大腸菌は後者に該当しますが、わが国でも広い範囲で食中毒の起因菌として検出されています。静岡県で実際におきた事例の解析と、情報の素早い共有により適切な対応ができたこと、検出に対して病原体の生物学的特性を踏まえた適切な検査方法を選択することによって、検出感度を上昇させることができることが示されました。また、一定の割合で症状を呈さない保菌者がいることから、日頃のスクリーニング体制を強化することにより、食中毒の予防と災害リスク減少も同時に実現できることが示されました。

昨年東京で流行したデング熱について国際感染症センターから疾患の概要、診断と治療、熱帯に分布するネッタイシマカではなく、日本に常在するヒトスジシマカを介した流行の特性、予防法についての報告がありました。グローバル化・気候変動している現代社会において、デング熱、チクングニア熱、ジカ熱などの感染症は必ず留意すべき疾患となってきています。

服部俊夫名誉教授の司会により、静岡市保健所がさまざまな感染症に対して行っている予防と啓発の取り組みが紹介されました。結核、HIV、ウイルス性伝染病、肝炎ウイルスなどに対しての先進的な活動で、スクリーニングを効率的に行っています。また、フィリピンでレプトスピラ症に関して人獣共通感染症として長年研究を継続されてきた柳原保武先生からレプトスピラの生物学的特徴、疫学調査、家畜や動物への感染頻度などについての報告がありました。フィリピンは自然災害が多発する国でもあり、保健省を中心に予防体制が取られていますが、災害により感染のアウトブレイクが起きることも知られています。人の健康を守るためには、動物の健康と植物を含めた環境の健康を保たなくてはなりません。

最後に江川新一教授が、兵庫行動枠組から仙台防災枠組に至る国連の防災に関する取組と、仙台防災枠組に「健康」という単語が 34 か所も取り入れられた経過について報告しました。災害は人々の健康に大きな影響を与えることは誰しもが認めるところですが、保健医療クラスターと他のクラスターの協力・協調は必ずしも十分になされていないのが現実です。ハザードへの暴露を減少させ、脆弱性を少なくし、対応能力を強化することによってリスクを減少させるという考え方にもとづいて、感染症やメンタルヘルスに対して災害研が取り組んでいること、静岡県が避難所運営ゲームを通して医療従事者や地域住民の対応能力向上に取り組んでいることなどが紹介されました。

仙台防災枠組はエボラウイルス感染症などのバイオハザードを含む災害に対してもすべてのクラスターが協調してリスク減少することを勧めています。保健医療従事者が防災に関して高い興味をもち、日常の保健医療レベルを向上させることが災害に強い社会を形成することにつながることを強調されました。東日本大震災の教訓を生かし、今後も災害感染症セミナーを継続していきます。



主催者の静岡県立総合病院 田中一成院長



座長：静岡県立大学 古賀震教授



世界防災会議について報告する江川新一教授



災害感染症や原住民の伝統的な知識に学ぶ防災についてまとめる服部俊夫名誉教授



100 名以上の医師、薬剤師、検査技師などが熱心に聴講する会場の様子



デングウイルスや他の病原体を媒介する蚊について説明する国際感染症センター 忽那賢志医師

文責：江川新一（災害医学研究部門）